

昭和55年2月1日 第3種郵便物認可
平成25年11月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第39巻第11号



俳句雑誌[おき]

11
月号

沖
発行所

徒爾の館

能村 研三

「登四郎特集号」

三内丸山遺跡
縄文の巨木聳ゆる良夜かな

みちのくの縄文月夜栗の笑み

斜陽館 二句

太幸には徒爾の館や秋寂びぬ

三方につづく踊り場秋日ざし

俳句総合誌において、先師登四郎の特集は何回か行われたが、その中でも一番印象に残っているのが、昭和五十年十月号の「俳句研究」である。これは、現在の編集体制でなく俳人の高柳重信氏が編集長を務める「俳句研究社」という会社から刊行されたものである。私もこの「俳句研究社」には先師の原稿を届けに何度か行ったことがあるが、雑然として薄暗い事務所の中に編集長の高柳重信さんと、助手の沢好摩さんがおられたことを記憶している。

実はこの本を久しぶりに開けてみたのは、俳人協会から刊行が予定されている脚注シリーズ「能村登四郎」を編むために、その本に掲載されている登四郎の自選二百句を見るためであった。

この特集全二百三十ページのうち半分以上の百二十ページを特集にあて、実に二十五人の執筆者を揃え、様々な角度から登四郎を捉え評論を行っている。もともと高柳さんの「俳句研究」は作品の発表の場というより評論中心の雑誌であるのでそれも頷ける。執筆者には、鈴木六林男、佐藤鬼房、野沢節子、田川飛旅子、上田五千石、藤田湘子など既に亡くなられている方も多いが、現在の特集の「一句鑑賞」といった形でなく一人一人がかなりのページを割いている特集である。

高柳重信氏が亡くなられてから

金木・雲祥寺

曼珠沙華後生車の逆回し

棟方志功記念館

「柵」打つは志功のしるべ秋澄めり

秋惜しむ太宰・寺山生れし地に

野仕舞のみちのくの火はこまやかに

茸狩の明るく過ぎて戻りけり

食初めの嬰に表情小鳥来る

は、この「俳句研究」も角川グループから発行され、それまでと企画内容も異にするものになり、その他にも多くの俳句総合誌が発行される時代になった。いわゆる「俳句ブーム」ともてはやされた時代である。

最近はその「俳句ブーム」も冷え始め、俳句総合誌も何誌かが休刊をやむなくされた。今の時代では、これだけの特集を組める雑誌も無くなってしまったと同時に、その評論の書き手も揃わなくなってしまったようだ。

能村 研三



雲のかげら

林 翔

枯野の沖

「沖」の誌名が登四郎第三句集の書名『枯野の沖』によることは「沖同人会報」に書いたが、では、その枯野はどこにあったのか？

火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ

どうやら、旅先ではなく、住まいの近くの野原という感じである。

当時の能村家の近くに、やや広い空き地があった。夏には雑草が生い茂り、冬にはそれが枯れた。空き地なのだから「枯野」というのはややオーバーだが、そこは俳句の「虚」である。その空き地の端の方では、近所の人がよく焚火をしていた。そこは「実」である。散歩とか、出勤の往きかえりなどに、登四郎がよく見る情景であつたらう。登四郎が空き地の南側に居たとする。近所の誰かが焚火をしている。その煙ごしに、空き地の北側を通る人が見えたのだ。しかしそれだけでは、ろくな句になるまい。

「沖」は普通は海の遠方を指すのだが、語源は「おく（奥）」だから

その 蕾美^はしや 愛^{めぐ}しや 曼珠沙華

「あたしたちも直^ちきね」と 媪秋彼岸

杖なしで歩いて 秋の歩と思ふ

尺をもて測りたきほど 秋入日

夕月の白さや雲のかげらとも

坂のぼり名月を見む脚ぢから

秋の酒壺武士の刀のごとく抱き

予報いかに溜池ほどの秋の空

まだ売れぬ三角の地よ蟻蛸跳び

物思へば洋梨も「考へる人」のさま

陸にも使える言葉。実際は空き地の先であつても、「枯野の沖」と表現することによつて、平凡な景を見事に文芸化して見せた登四郎なのであつた。

創刊号の次の昭和45年11月号は、『枯野の沖』特集号として編集された。俳壇からも十二名の著名俳人が寄稿されているが、金子兜太氏以外の十一名は、もう故人となつてしまわれたのが、感慨深い。

林
翔



蒼茫集



こころばへ

辻 直美

白芙蓉

渡辺 昭

わが身さへ遺品の一つ秋灯
赤とんぼ増えて戦ふ事をせり
羅馬への道も知らずよ端居して
あのころの木冷蔵庫割烹着
打水やなんとたひらなこころばへ
喪ごころの少し澄みゆく梨一果

いわし雲

梅村すみを

掃き寄するものに空蟬混りぬし
目葉の頬へ流るる夜涼かな
一村の昼しづかなり稲の花
必然のやうに拡がるいわし雲
衣被の塩味ほどの余生かな
桔梗や男に言ひ訳など無用

葉雫を散らしゆく風実南天
躑躅し音に合掌秋へんろ
盆東風の夜目にも白く兎波
風涼し樽供養の故人来よ
陶土搗く音の間遠に白芙蓉
噴水の抜き身の飛沫勢ひつつ

きづな

北川英子

沖波の一と呑みに失す二日月
たうとうこの病名貰ふ稲びかり
掌を溢れ落つ秋水を見詰めをり
月満ちて今日の華燭に集ふかな
かく細ききづな脈々吾亦紅
明日からの鬪病一二十日雁渡し

山 河 秋葉雅治

月今宵山河正しく位に即きて
潮みちに乗りて声湧く月見船
焚き終へて秋風かよふ登り窯
試歩の杖伸ばすときめき小鳥来る
白桃むく妻の小爪に紅さして
高嶺はや白絹まとひ鳥渡る

山影山 千田 敬

人は頬杖牛は反芻天高し
炎の舐むる牛舌の反り九月来る
のつけから酒とこ糸かけ初秋刀魚
運慶如来忽と現はる秋思かな
山影は山に戻りて法師蟬
葡萄いま飛ばす種なし土間もなし

虫浄土 酒本八重

桐一葉下校子すいと拾ひけり
巾着田いま虫浄土露浄土

天の川家のかたちが町つくる
二つ目の案山子の畦で待ち合す
抱へては余るカーテン雁渡し
鯛雲昭和のかほで仰ぎけり

魚 籠 安居正浩

秋風や魚籠に微妙といふ形
鏡中に月日ふはふは鉦叩
秋蟬の命すんとアスファルト
音がしてやつぱり花火見たくなる
鶏頭の群れて自刃の匂ひせり
秋簾あげて古典の世に入る

飴いろに 千田百里

連合ひも夏の帽子も飴いろに
木歩忌の磁石の針の揺れ止まず
酒煮切る香を立て厄日やり過ぐす
灯下親しといへど眼の荒使ひ
夜食の灯ならぬ寝酒のともしかな
方舟をふとピーナツの殻割つて

潮鳴集



いさぎよし

篠藤千佳子

噴水の一人称の吹き上ぐる
とびきりの器にゼリーふるへをり
片意地を張りたる吾へ扇風機
たいせつなことに向き合ふ蛍の夜
夜の秋の裁断の音いさぎよし

空 気 中尾公彦

ペン立てにペンのこみあふ厄日中
ひぐらしの幹のまはりの微熱かな
アンモナイトの渦の曲線野分立つ
天上の空気つめたし曼珠沙華
かりがねや木箱に並ぶ試験管

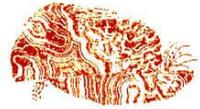
さらさらの血 細川洋子

虫時雨さらさらの血になりさうな
天の川ひとに海馬といふところ
爽やかや記憶をつづつ手繰り
澄む秋の澄めるだけ澄み匂はざる
後遺症
鯛雲父の病名告げられて

新どうふ 今瀬一博

四方の山より水来たり新豆腐
掌の上の耐震構造新どうふ
粗食とは一汁一菜今年米
まづ足が出て秋扇の鳥獣画
新涼や飛鳥の宮の鉋跡

沖作品



能村研三選

修羅を経て魚籠に放たる罔鮎

市川市

和田 満水

Gパンの膝の横糸秋に入る
新涼や名工五代の竿持たば
二百十日ポケット多くて探しもの
呑気とは惚けかも知れぬ合歡紅葉
爽やかに別るるほかはなき別れ

福岡

小林 奈穂

二百十日喫煙室の隔離めく
風は秋読み返したる母子手帳
胎児いま十一センチ水澄めり
飛行機の窓は小さし星の恋
山峡は葉研にも似て唐辛子
新米の来て息災を知る縁
消しゴムの角のとれたる良夜かな
昇降機耳圧しをる厄日かな
千の手の芒のやうに観世音

東京

齊藤 實

舵音のさやかジオラマ船場所
桃冷す忍野の水の透きとほる
門川に洗ひ場のあと芋殻焚く
送り火や家の数だけ橋かかり
微睡の中へそろりと初ちちる
常連の客と店主の夜長かな

市川市

宮島 宏子

風にゆき風にかへりし赤蜻蛉
枝豆のときに空虚と出会ひけり
秋茄子や齢を重ねぬればこそ
葬列の真昼見送る泡立草
かりかりと二百十日のくわりんたう
魚跳ねて金属音のする九月
古鍋の妖怪めきて厄日前
大文字闇に滲むや雨あがり
爽涼の東正門職を辞す

神奈川県

菅原 健一

東京

七種 年男

沖作品 15句選評

*
能村研三

二百十日ポケット多くて探しもの 和田 満水

二百十日はちょうど季節の変わり目でもあるため、気象の変化が激しく、暴風雨にさらされ多くの被害をもたらす。特に農家では厄日として恐れられている。二句一章であるが、二百十日とポケットの関係を余り詮索すると句が面白くなくなる。しかし、この頃に着る作業着などはポケットが多く、こまごましたものをあちらこちらに仕舞うことが出来る。それが確かに便利ではあるのだが、いざ何か必要としたとき、その何かが中々出てこないで困ることがある。ポケットという常に身につけておきながらも探している時間のもどかしさが面白く描かれている。

爽やかに別れるほかはなき別れ 小林 奈穂

小林奈穂さんはご主人の転勤の関係で、長崎から福岡に引越しをされた。長く慣れ親しんだ人との別れは、さびしいものであるが、いつまでもそうしている訳にはいかない。仲間たち一人一人の友好の絆は深く、別れ難いものがあるが仕方がない。

涙など流すことなく、笑顔で爽やかに別れたいと前向きに考えた。やはり若い方の新しい感覚である。

山峡は薬研にも似て唐辛子 齊藤 實

「薬研」は別名「くすりおろし」ともいい、薬効をもつ草・根・木や動・鉱物質のものを粉碎するときに使う一種の製薬用具で、また唐辛子の調製などにも利用されたと言う。江戸時代から堀の形が「薬研」に似ていたことから「薬研堀」などと呼ばれている。齊藤さんは東京の下町にお住まいの方であるから、両国薬研堀の七味唐辛子のことはよく知っておられるのだろう。青森県の下北半島には、湯口の形が「薬研台」に似ていることから薬研温泉と呼ばれているところもある。

門川に洗ひ場のあと芋殻焚く 宮島 宏子

門川とは、柳川や佐原のような水郷に面して家々が立ち並び人々の生活の中に目の前の川や水路が密接な関係をもっているところと想像した。玄関や勝手口からはそれぞれ昔、川の水を生活用水として使った痕跡が残っていて、今はお盆の時などに迎え火の芋殻を焚く場所となった。水辺の風景が織り成す独特の情緒に触れ合う一句である。

常連の客と店主の夜長かな 菅原 健一

普段からの行き着けのバーや飲み屋さんであろうか。一元の客ではなく気心が知れた馴染みの店なのだろう。店主の方も長年客と付き合っているからには、その会話も心得ていて息があっている。夜が更けるのも忘れて、またそこには客と店主といった関係を越えるような親しい付き合いがあった。(以下略)